

〔人物画名品展によせて〕

「伝淀殿像」をめぐる

武家の肖像画は室町時代以降に盛んに制作されました。そのほとんどが供養像です。菩提所として寺院が造営されると、礼拝の対象となる供養像が必要になります。供養像には像主の個性的な特色を写すことが求められ、しばしば画賛が加えられます。画賛から像主の没年や制作年代がわかれば、絵画や染織の研究においても重要な基準作品になります。大部分が当主であった男性の肖像画ですが、当主の母であり、妻であり、娘である女性や夭折した子供の肖像画も制作されました。特に、戦国時代から江戸時代初期にかけて、数多くの優品が残されています。正装した男性の肖像画では、しだいに姿勢や着衣の形式が定まってきましたが、女性や子供の肖像画には、多様な表現が見られます。概して華やかに表現され、後の美人画に通じる芸術性が認められます。これらの作品には、画賛が失われ、像主が不明にもかかわらず、歴史上の著名な人物を像主として伝えられた作品があります。この場合、いわば作品によって像主が選ばれているわけです。

奈良県立美術館に所蔵される「伝淀殿像」(図1)もその一つです。風俗研究家として知られた画家、吉川親方氏(1894~1979)の旧蔵品です。豪華な衣装を纏う脇長けた女性が両手で赤い房を付けた数珠を繰り、上畳に姿勢を正して端座する姿を描いています。斜めに座るように見えますが、上畳の縹緋縹緋の方向から、正面を向く姿を向かって右から眺めていることがわかります。豊臣秀吉の側室であり、秀頼の母として権勢を極めた淀殿(?~1615)にふさわしい高貴な威厳を感じさせる像容です。上部の余白には、「たいのめ しめじがはらの さしもぐさ 我が世の中に あらむかぎり」と大きく和歌が記されています。この和歌は謡曲「田村」に取材し、初句の「た」が「なを」となる本歌が「新古今和歌集」巻第二十・釈教歌の巻頭

に収録されています(『館蔵優品展』奈良県立美術館 1987年)。この和歌は清水寺の本尊、十一面千手観音の託宣歌であり、その大意は、「私がこの世にいる限りは、どんなことがあっても、私を頼りにしなさい。」ということです。清水寺は征夷大將軍に任じられた坂上田村麻呂によって建立されました。謡曲「田村」は田村麻呂の霊が千手観音の靈感によって戦いに勝利した話を語る夢幻能であり、武家に好まれた曲目です。作品の軸裏に「田村 た、頼女」と墨書された巻止が貼られています。「田村 た、頼女」を、改装の際に生じた「秀頼母」の誤写と解釈し、像主を淀殿像とする根拠と考えられていましたが、これは画賛の和歌の初句に過ぎません。作品の像主や絵師、制作年代を推定するには、同時期に制作された女性の肖像画と比較し、検討する必要があります。この作品とは別に、「淀殿像」(図2)と伝えられる肖像画が養源院に所蔵されています。縦が123.5cm、横が61.9cmという女性の肖像画にしては大きな作品です。養源院は淀殿によって父、浅井長政の供養のため、文禄三年(1594)に創建され、淀殿の没後、元和七年(1621)に妹の崇源院が再興しました。崇源院は徳川秀忠の正室、お江です。両作品の基本的な姿勢は似通っています。淀殿は数々の寺社の造営を経済的に援助しており、複数の肖像画が制作されたと思われます。その際、最も権威のある図様が後の制作の参考になされ、踏襲されたこととすれば、共通する姿勢を示す両作品がともに淀殿の肖像画である可能性が残ります。しかし、両作品を比較すると、全体のプロポーションや頭部の量感表現、衣紋線の質など、絵画表現には少なからず相違があります。さらに「伝淀殿像」(図1)の絵画表現の特色を検討するために、『後藤徳乗夫人像』(図3)と比較してみます。この作品の像主は左膝を立てていますが、「伝

淀殿像」と同様に、華やかな衣装を纏い、両手で数珠を繰る姿を斜め右から描いています。後藤家は家業の彫金によって代々室町幕府に仕えていました。五代目の徳乗は秀吉に重用され、同家中興の祖とされています。画面の上部に題目「南無妙法蓮華經」が記された日蓮宗の供養像であり、右に没年月日「慶長十五年(1610)庚戌七月七日」、左に法名「悲母妙徳霊尼」が記されています。この作品では、着衣の上から座る方向をはじめ、肩から臂にいたる体の線まで感じさせます。優れた人体表現と、目、鼻、口が小さく、頬骨の張った個性的な容貌を写す写実性から、女性の肖像画でも高く評価されています。このように数珠を持つ姿勢は武家の男性の肖像画には稀です。先例は各宗派の祖師像に求められます。祖師像には生前の姿を伝える個性が描き分けられましたが、やがて図様が定まると、複写されて流布しました。『後藤徳乗夫人像』の顔や体の輪郭は「熊皮御影」と呼ばれる「親鸞上人像」(図4・奈良国立美術館蔵)を想わせます。『淀殿像』、『後藤徳乗夫人像』との比較によって、『伝淀殿像』の絵画表現の特色が次のように整理できます。まず、細密に描き込んだ衣装の表現です。下着、小袖、打掛と徐々に深みを増す赤色系の色を重ねて微妙な階調をつくり、打掛には摺箔と刺繍によって豪華な装飾が施されています。細密な衣装表現に対して人体の立体感ほとんど着衣に隠されています。肩幅が広く、歌仙絵の女性歌人のように、着物の裾が立ち上がる姿は平板な印象を与えます。顔(図5)にも現実感のある個性的な表現は認められません。わずかに額と頬がふくらむ蘭形の頭部を真っ直ぐ

に立て、無表情に前方へ視線を向けています。目と目の間隔が広いおっとりとした顔立ちや小さな手は雛人形のように理想化されています。なお、手を小さく描く特色は、男性の肖像画では、慶長年間(1596~1615)に制作された数点の「豊臣秀吉像」(高台寺蔵・逸翁美術館蔵)、『小早川秀明秋像』(高台寺蔵)に見られますので、時代的な傾向であったのかもしれませんが、最後に重要なのは、このような容姿を表現する線描(図6)です。細く均質な線描は金属線を象嵌したようです。打込みや撥ね、強い張りや鋭い折れはほとんど認められません。このような特色を示す『伝淀殿像』と極めて作風の近い作品があります。大善寺に所蔵される「中川秀成夫人像」(図7)です。この作品は「洞仙院像」として知られていましたが、近年、像主が中川秀成の正室、虎であることが確認されました(小善寺通「大善寺蔵「洞仙院殿像」の像主をめぐる」、『日本美術工芸』第667号所収、1994年)。豪華な衣装、理想化された顔(図8)、小さな手、細く均質な線描(図9)にいたるまで、数多くの共通点が見出せます。「慶長十五(1610)庚戌年正月十日」という像主の没年月日を記す画賛が加えられ、没後、数年の間に制作されたと推定されています。『伝淀殿像』は同時期に同じ画派の絵師によって制作されたと考えられます。制作年においても、生前の淀殿を描いた肖像画である可能性が残されたことになります。(中部義隆) ※図は2、3は『大和文華』第50号・女性肖像画特輯(大和文華館、1972年)、図4は『特別展 日本の肖像画』(大和文華館、1991年)より複写いたしました。

図8



図5



図6

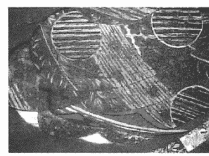


図4



図7



図9



図1



図2



図3

